

[報告] 第 33 回歴史地震研究会参加を通して

海洋研究開発機構 高知コア研究所* 谷川 亘

A report of the 33th Annual Meeting of Historical Earthquake Studies

Wataru TANIKAWA

Kochi Institute for Core Sample Research, JAMSTEC, 200 Monobe-otsu, Nankoku, Kochi,
783-8502 Japan

§ 1. はじめに

第 33 回歴史地震研究会は 2016 年 9 月 11 日から 9 月 13 日の 3 日間にわたって開催された。私にとって歴史地震研究会の参加は昨年に引き続き 2 回目となる。東北地方太平洋沖地震が発生して 5 年半の月日が経つが、今もなおその大震災の傷を背負いつつ復興に立ち向かっている岩手県沿岸部の大槌町で研究会は開催された。私はこれまでに被災地も含めさまざまな場所で学会や研究集会に参加してきたが、参加する前からこれほど緊張感を持って臨んだ学会は未だかつてなかった。本報告では、11日に実施された「ワークショップ」と13日に実施された「巡検」を中心に記述する。

§ 2. 道中

ワークショップや巡検が実施されることもあり、大槌町の震災後から現在までの記録を新聞記者の現場目線で記した「理念なき復興」(東野真和 著)という本を購入して何度も読み返し、大槌町の背景を勉強して研究会に臨んだ。今回は交通機関も復興の途上にあることから、新花巻駅からチャーターバスに乗り、会場の大槌町までの移動となった。釜石市に入るあたりから、津波災害と復旧が入り交じった風景が見えてきた。『過去の津波浸水区間 ここから』と書かれた標識を目の当たりにして、ここは被災地だという実感が沸いてきた。大槌町に至る道中もまた、研究会の一部であるのだと感じた。

さて、研究会は城山という小高い丘の上にそびえ立つ大槌町中央公民館で実施された。会場から外に出ると大槌湾が見渡せる展望場所があり、そばには災害記念碑と神戸市にある「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り」から分灯されたガス灯の記念碑が建てられ

ていた。展望台からは、震災遺構として保存するか否か議論されている旧町役場の建物が、肌色に露出した復興工事中の平地に囲まれひっそりとたたずんでいた。津波震災のことを知らない人たちは、これが復興半ばの街の様子だとは気づかないかもしれない。



写真 1. 城山から見下ろす復興工事中の町方地区

§ 3. ワークショップ

例年の研究会であれば講師を呼んで特別講演会を実施するところ、今年は趣向を変え、大槌町民の方々も交えた「大槌町津波アーカイブに向けたワークショップ」が開催された。大槌町は津波被害により多くの建造物が破壊された結果、解体、住宅再建や集団移転により町並みが大きく様変わりつつある。こうした町の変革期のなかで、役場職員が津波被害により 40 名ほど無くなった旧大槌町役場を「震災遺構」として保存するか議論が大槌町で進められている。このような「震災遺構」の保存は、現代に限らず、歴史的な自然災害の遺構保存においても重要なテーマである。現在、私たちは高知県の地震津波碑のデジタルアーカイブ化を進めている。この活動は、石碑の情報および石材そのものが風化しつつある中、石碑が後世に

* 〒783-8502 高知県南国市物部乙 200
電子メール: tanikawa @ jamstec.co.jp

伝えようとしている防災意識の警鐘を後世に伝える手段の一つとして提案したものである。「震災遺構」の保存問題もまた、災害記録を将来にどのように伝えるか、同じ問題を私たちに突きつけているのである。さて、ワークショップは参加者が5～6人の(大槌町の地区の名前を付けた)班に分かれて、コーディネータ(進行役)を中心に話し合いが進行した。「アーカイブ」に対する「賛否」、および「何を」「どういう目的」で「だれ」が「どこ」で「どうするか」という一つ一つの議題に対し、各自意見を述べて、机の上に置かれたA0サイズの紙に意見を集約していった。議論を進める上でボールを利用したルールがあった。ボールを持った人だけが意見を述べられること、意見を述べた人は発言後ランダムに次の人にボールを渡すこと。このルールのおかげで私たちの班はスムーズに議論を進行できた。ただし、最後の頃はルールと無関係に、侃々諤々の議論となったが、特に問題なかった。

私たちのグループは出だしから「震災遺構のアーカイブ」の実施の賛否が分かれた。反対意見は、震災遺構を見ると辛かった記憶を思い出してしまうためにない方がよいという理由が主だった。一方、賛成意見は災害記録を風化させない存在として有るべきという理由が主なものだった。その折衷案として、多くの人々が被災した場所である生々しい建物ではなく、象徴的かつ美しい(たとえば広島原爆ドームのような)構造物がよいという意見に集約された。「だれ」が「どこ」という議題はアーカイブを継続していくという上で非常にクリティカルな問題であった。ワークショップの途中で紹介された大船渡市で開催された「津波と綾里博物館展」は、地域住民の強い意志と協力があれば、国や県が管理する大きな箱物でなくとも、アーカイブ事業は実施できる可能性を見いだしている。



写真2. アーカイブワークショップの様子。

こうしたアーカイブ化の背景として、その土地の歴史・文化・自然を理解し、その中でアーカイブの対象をどのように位置づけられるかを考えることも必要であろう。実は、ワークショップのはじめに、吉里吉里地区の小学生を中心とした団体による『吉里吉里虎舞』が披露された。拍子にあわせて虎が会場を躍動的に飛び跳ねる様子、人間と虎とが間合いをとりながらの勝負、がぶりと笹に食い入る様子など、興奮の連続であった。これほどダイナミックでかつ緊張感のある演舞は滅多にお目にかかるものではなく、その技能の高さには驚くばかりであった。演舞に続く講演では、まず岩手県大槌町の議会事務局長である佐々木健さんから、大槌町にまつわる歴史文化遺産について紹介をいただいた。伊能忠敬、宮澤賢治、井上ひさしをはじめとした歴史文化人と大槌町との結びつきから、湧き水に至るまでわずかな時間にもかかわらず大槌町の魅力を余すところなく紹介していただいた。続いて、明治学院大学の浅川教授から、失われつつある方言「吉里吉里語」の「辞典」を紹介いただいた。演舞鑑賞と二つの講演から共通して見えてきたのは、大槌町で震災遺構などのアーカイブを考える前提として、まず、大槌町の歴史・文化・自然の中での対象とするアーカイブの位置づけである。「ジオパーク」のコンテンツの一つとして災害「アーカイブ」機能を持たせるというアイデアが発表されていた。アーカイブ機能の維持や拡張を考えるとよい意見だと思う。

ワークショップでは最終的に意見集約することはなかったが、このような意見交換の積み重ねから、次第に研鑽されたアーカイブ計画が構築されることを期待している。

§ 4. 展示

今回会場では、東京大学岡本健太郎助教が用意された大槌町アーカイブに連動した以下の3つの大型作品が展示された。1) 変遷する町の姿を同じ位置から写真記録をする「定点観測」展示。2) 大槌町の地形をかたどった立体模型に対してプロジェクターを照射して津波が町に押し寄せせる様子などを表示する展示。3) 震災以前の大槌町の町並みを再現した立体模型の家や街路のあちこちに、透明プラスチックの切れ端が刺さっている作品(切れ端には、町民ひとりひとりの思い出の場所としてのコメントが書き込まれていた)。いずれの作品も、「公共事業的なアーカイブ」の枠を飛び越えた芸術作品のように見える。昨今地方で行われている現代アート展(瀬戸内国際芸術祭、

大地の芸術祭)では、その土地の人々の思い出や歴史記録をモチーフにしたものも多く見受けられるが、大槌町の作品には共通したものが見いだせる。大槌町のアーカイブ作品は、震災というきっかけで製作されたものである。しかし、源流としてあるのは、歴史の一部を切り取った震災記録の保存ではなく、大槌町が継承してきた歴史記録の保存ではないだろうか。ワークショップではアーカイブを「どこ」に保存・展示するかという議論も行われたが、「美術館」というのも一つの選択肢になるのかもしれない。



写真3. 大槌町の町並みを再現した立体模型。人々の思い出のメッセージが随所に添えられている。

§ 5. 巡検

糠雨の中、巡検は宿泊先・懇親会先であった「三陸花ホテルはまぎく」からスタートした。このホテルは海に面しており、津波の被害を直撃した。大浴場の浴槽は一階の海の際で海面からわずかに高いところにある。そのため、大きな波しぶきが何度もバシヤンと打ち付ける風景を目の当たりにでき、津波被害の甚大さを想像できる。ちなみに、このホテルと皇后美智子さまとの縁を取り持った「ハマギク」の花言葉は「逆境に立ち向かう」であると佐々木さんが紹介していた。



写真4. 小枕地区の造成工事。

いくつかの集落を訪れたが、小枕集落と吉里吉里集落の一部は昭和三陸津波地震後に国の事業として高台移転が実施された地区である。しかし、高台移転地にもかかわらず、東日本大震災では多くの犠牲者が出た。小枕集落で亡くなった人のなかには大槌町の外から出向で長期滞在していた人も多数いたようである。①外部から移住してきた人に対して町の抱える災害地理的特徴(ここでは津波被害想定)を周知させること、②高台移転地だからと言う理由で安全性を過信しないこと、の重要性を認識させられた。

この巡検では、避難と復興に大きく携わった吉里吉里集落の2人の方から貴重な話を聞くことができた。1人は天照御祖神社宮司の藤本さん。

「早く復興に区切りを付けて、復興協議会会長を辞めたい。町長は4年任期だが、私はすでに5年もいる。」という話から始まる。ずるずると復興が遅れると一時避難している人が町に戻らなくなる、という強い危機感の表れでもあろう。再開発を巡る宅地整備や土地を巡る人々の思いについてお話を聞くことができた。この神社は津波発生により、一の鳥居や狛犬は被害を受けたものの、石段を登った本社は被害を免れた。また、高台移転開発の話について驚かされたのは、土地の埋め立てにより、もともと一の鳥居があった地点から本社に登る石段の約半数である30階段、高さにして5m分が、高台整備により埋め立てられてしまったということである。何気なく鳥居をくぐり、石段を登って本殿に移動したのだが、その鳥居は実は二の鳥居で、震災後の土地改良に全く気づかなかった。



写真5. 天照御祖神社境内入り口。鳥居手前の砂利でなされた場所は、震災以前は30段の石段が下に続いていた。

もう1人お伺いしたのは北田氏宅で、昭和三陸地震直後に建てられた歴史ある住宅建造物の見学も兼

ねてお話を伺うことができた。この北田家は東北沖地震時には約30名もの避難者を1ヶ月間受入れたという「奇跡」の避難所であるが、一般の民家でそのような大人数を泊めることができたのは、実は、黒森神楽と呼ばれる神楽の巡業を受け入れ、十何人も神楽衆を接待している神楽宿だったからである。また、沢水を利用できたことや、田んぼで利用する大きなろうそくがあったことも避難に役立った。しかも、たまたま里で取れた熊肉を冷凍保存していたこと、地震で立ち往生した配送車に積まれていた魚を分けてもらえたことなど、いくつかの偶然が重なった結果、つらい避難生活をしのぐことができたというのも興味深い話であった。この家は東北沖地震でもほとんど損害がなかったようで、昔の職人の技術力に驚かされた。ただし、この住宅は昭和三陸津波地震後の復興住宅とは関係がない。当時の復興住宅が残っていれば、重要な災害復興記録となり得たと思うとやや残念である。

私が住む高知県でもいずれ南海トラフ地震により津波が発生すると言われている。昭和南海地震から70年が経ち、被害と復興の痕跡もすでになく、人々の記憶から忘れ去られようとしている。しかし、今回お話いただいた2人のように震災と復興の記憶を語り次いで、記憶をたすき掛けしていくこともまた、一つの災害アーカイブのあり方であろう。



写真6. 被災当時の様子を話す北田氏

§6. おわりに

私自身、地震津波碑のアーカイブ化の研究をしていることもあり、ぜひ大槌町で見ておきたい津波地震碑があったので、12日朝、参加者とは別行動で安渡地区へ足を運んだ。「大きな地震が来たら戻らず高台へ」と刻まれたその碑は安渡地区の高台に立っていた。一見するとごく普通の碑であるが、実はこの碑は「石」ではなく「木」でできている。石碑と異なり、木碑

だと短い期間で腐ってしまうため、何度も建替える必要があり、その度に記憶・気持ちを新たにできる。このアイデアを当時の大槌高校生らが実行に移し木碑は完成した。さて、次のこの木碑の立替えは2017年3月11日、つまり、4年毎の建替えである。この木碑の情報を知ったときは、20年や50年毎の建替えを想像していたのだが、実際にははるかに短い周期であった。安渡地域の人たちの、災害の記憶を風化させず犠牲者を二度と出さないという強い思いがこの「4年毎」という数字に如実に表れている。



写真7. 安渡地区の木碑

この大槌町で開催された研究会は、自らの目で災害復興の様子をつぶさに観察し、町民の経験を聞く機会が得られ、非常に貴重な経験となった。それと同時に、自分のこれまでの学術研究のあり方を今一度省みるよい機会となった。歴史地震研究会(大槌大会)の準備にご尽力いただいた事務局のみなさま、ならびに大槌町のみなさまに、厚く御礼申し上げます。大槌町が一日も早い復興を遂げられ、普段通りの生活に戻られることを心よりお祈り申し上げます。